

2000年に生きた証を
仁王門大修理



阿波三峰

親子の鐘の中津峰

朝念暮念

2000年記念事業仁王門大修理

ご寄付ありがとうございました。

バス便、2/18 3/18 9:30アミコ前発

問い合わせい合わせ：徳島市バス観光課 088-652-2133

中津峰山如意輪寺

徳島市多家良町中津峰
TEL088-645-0008 FAX645-0508
http://www.rmt.ne.jp/~nyoirin
nyoirin@rmt.ne.jp

「中津峰の観音さまの ご慈愛を受けて今日生きる」

吉田範三さん特集

この原稿は北沖洲町の吉田範三さんに「執筆頂きまし
た。自ら経験された五話の霊験記が綴られています。
氏の人生観音様とともにあったといつても過言ではない
希有な経験をされた方です。本誌では原稿にできる限り
忠実に、2ヶ月にわたって掲載させていただきます。

一、心臓停止する。

その日は平成九年四月
十六日である。「公民館ま
つり」の世話役をしていた
ため忙しい毎日が続いて
いた。その上、二日前から
風邪気味、市内の病院で二
回の点滴を打つたこと
だった。「今日は体調がお
かしい」と思い、昼過ぎに
病院へ駆け込んだ。医者は
私を見るなり救急車を呼
んだ。

ピーポー々々と救急
車が徳大病院へ疾走する。
車中で心電図を取るから
横向きに寝るようにとい
う。しかし、横になろうと
すると息苦しく心臓が止
まるようだ。救命士が「反
応が出ない」といって震え
ている。息がでない、付
き添ってくれている看護
婦さんが「頑張ってるね」と
叫ぶ。「嗚呼、これで自分
の人生は終わりか」と思っ
た。それから何の物音も
聞こえず、しばらく静かな

時が流れる。今まで生死を
さまよったことが二度あつ
た。その都度観音様の御導
きで生命を頂いた。今度は
四度目だ。もうお導きは
ただけないのであろうかと
ふと思った。いや々々、小
さいときから中津峰の観音
様は千里の道も飛んでいつ
て救ってくださる両親から
聞かされて育った。三回も
生命を頂いたのはありがた
いことだと思ひ直した。
徳大病院に到着し、スト
レッチャーに乗って治療室
に走る。苦しく息が止まる
寸前を感じる。付き添って
くれている医者に「先生、
もうまもなく息がとまりま
す。最初の処置をお願いします」とい
う。最初の処置をお願いしますから、
を三年やっていきますから、
最前の努力をします」と力
強い先生の声。それを最後
に気が遠くなり意識がなくな
った。そして、午後二時
三十分、心不全で心臓が停
止した。六十二歳であつ

多くの医者が私がお願い
したように最善の努力をし
てくださった。とはいえ、
ほとんどの先生が「もうダ
メだ」と見極められたと後
刻教えてくださった。
どれくらいの間だった
のだろう。不思議なこと
に停止したはずの心臓に微
弱な反応があり弱い動きを
示した。その頃、家族や親
戚が集められ「あとしばら
くしか持ちません」と告げ
られ、あと五秒四秒三秒と
秒読みにはいつていた。そ
して緊急ボタンを握りしめ
ていた。
私はというと、河を渡り
美しいいろいろの小花の咲
く野原を小高い丘に向かっ
て歩いていった。「多くのひ
とが静かに昇っていく。私
は「アツ」と思った。以前
ここに来たことがある。こ
の野原を昇ってはいけな
い。以前、観音様にお会い
した別の道が川沿いにあつ
たはずだ。と思つて一人で
走つた。息切れがして苦し
い。そのとき、目前が明る
くきらりと輝き、そこに観
音様がおいでになり微笑ま
れた。私は手を合わせてお
願ひした。観音様に導かれ
て歩いた。そこに以前見た
橋があった。お礼をいって
橋を渡り霧のなかを歩いて
きたとうれしかった。
どれくらい時間がたった
のだろう。目を開けてみ
ると点滴の主柱が三本立っ
て、十種類ばかりの点滴と
酸素吸入が行われている。

同時に多くの人が私を見て
いる。しかし、不思議に思っ
た。誰もが真剣な眼で私を
見ている。医者が声を出し
ている。〇、一五から二、七
に少しづつ心臓が動き出し
ており、さらに五、七と少し
づよくなりつつあるとのこ
と、計測が間違っているの
ではないかといっている。
私は「先生御世話になりま
す」といった。すると先生が
「アツ」と声をあげ驚いてい
る。弟と姉妹に「心配かけた
な、今もどつてきた大丈夫
だ」といった。弟が大声で
「会いたい人はないか。言い
残したいことはないか」と
聞く。「心配ない、何もなし
」といった。医者は「こんなこ
と考えられない」といい、
「まだまだ危険な状態です」
と言っている。風前の灯火
を見たようにみんな静かに
なつていった。
一ヶ月ぐらい経過しても
まだ点滴が続く。「水も口に
できない。その頃、医者には
「退院するよつなことは難し
い。回復してもベッドの上
に起きあがるのがやっとだ
ろう」といわれていたようだ。
さらに一ヶ月位して「退院
はできたとしても家でじつ
として、外出などは先ずで
きない。言語や手、足に後遺
症がでるであろう」との由
だが、私には聞かされてい
なかつた。その後も治療と
検査の日々が続いた。
私は毎朝、毎晩病室から
中津峰の観音様に少しでも
よくなるようお願いした。
一ヶ月ぐらいして、教授と

3月21日(水)
10:00~

弘法大師正御影供 土砂加持法会

ご先祖様のお彼岸のご供養に是非お参りください。

2000年記念事業収支決算書

収入の部	募金総額	44,840,500円
	寺負担額	5,180,213円
	他に原木の現物支給	
	繰越金、預金利息	10,851円
	収入総額	50,031,564円
支出の部(含消費税)	総額	50,031,564円
土公供(地鎮祭)経費		30,000円
募金経費		731,678円
郵便等手数料等		55,245円
仁王門移転解体修理工事費		23,800,000円
	基礎から屋根までの修復費用。消費税と割引していただいた金額です。	
各所修繕費		6,777,090円
	十番観音堂、庫裡屋根、木納屋、宝前橋欄干、本堂、馬堂、諸佛堂、大師堂(持ち上げ、修復)庫裡屋根、タワー、放水管等の塗装、持佛堂修復、タイムカプセルと収納不動尊、五色幕、庭補修の費用その他の費用。	
落慶法会費		5,145,510円
	記念品代、お布施、もち投げ等々の費用	
五大明王等文化財保存修理費		13,492,041円
	いよいよ今年四月1日より京都、(財)美術院、国宝修理所へ行きます。工期は二年間、	

医者が二十人ぐらい見え
た。教授が最初からの経過
を説明している。「息が途絶
え非常に厳しい状態で緊急
処置したが、あの状態で助
かった人は一人もいない。
充分な処置もしたが奇跡と
いうよりいいようがない」
といわれた。私には「天から
いただいた命ですよ。これ
からは大切にしましょう
ね」といつてくださった。
「皆様のおかげです。ありが
とうございます」といった
が、観音様に手を合わせた
ものだった。多くの先生や
多くの看護婦さんにお礼を
言つて、退院したのは十一
月初旬の大安吉日の日で
あった。

二、観音様との出会い

初めて私が観音様とお会
いしたのは昭和十六年、小
学校三年生の時である。
当時、両親は農家や半農
半漁で毎日忙しい人々に代
わつて中津峰の観音様にお
詣りして、御札を配布する
というお世話役をしてい
た。私は両親に連れられて
初めてお詣りしたとき、
ちよつとご開帳であつた。
多くの方々のお詣りでかな
りな混雑ぶりであつた。こ
のお方(観音様)が今まで
何度も助けてくださったと
じつとお顔を見つめていま
した。そのとき観音様の両
眼がきらりと輝き、微笑ま
れました。この瞬間の感動

は一生忘れないように心に
刻みこみました。それから
私が目を閉じると心の中に
観音様が微笑まれます。そ
して、今までにお会いして
いた方である。

三、水に溺れる。

先ず、私が最初に観音様
に生命を助けて頂いたのは
一歳八ヶ月の時。昭和九年
九月の風水害のおこる二週
間前のことでした。
短い竹に糸を結びつけた
針金を釣り針にして、小さ
な籠をさげ、父に手を引
かれて浜辺へ釣りにいつ
た。父が友人と話していた
ほんの少しの間に私がいな
くなつた。大騒ぎである、
隣り近所のみんで探して
くれたのが見つかからない。
百歩くらい先の川のなかに
何かものが浮かんでいると
いいました。舟を漕ぎ出し
てみるとそれが私だつた。
医者や学校の養護の先生
が人工呼吸をほどこしてく

れたが、何の反応もない。
両親は悲痛な思いで「もう
だめだ」とあきらめたとい
う。「ダメかも知れないが
少し腹に水がこつている
ので吐かせましょう」と養
護の先生が両足をさげて自
分の両足に腹を打ち当て
た。水を少し吐き出したも
のの息を吹き返した様子は
ない。よく見ると眼をグツ
と開いて異様な感じがした
という。一人のお年寄りが
この様子を見て、母に「梅
干し三ヶくらいを口の中に含
ませ、背中を叩きなさい」と
教えてくれた。ダメでも
ともという気持でそれを行
つた。その瞬間、一気に
水を口から吐き出し、「ギ
ャー」大声をだし、眼も
動き出した。生命を頂いた
のである。すぐ、お年寄り
を探したが、立ち去つたの
かいない。周囲の人も驚い
た、みんなも知らない人
だつた。母は生涯、観音様
であつたと信じていた。
(来月号に続きます)

儀式とセレモニーの間

先般、成人式が荒れた。
というより若者の振る舞い
は言語道断、弁護の余地は
ない。
そのなか、分からないな
いのはそれほど気に入らな
いの何故行くのか。私も
二十歳のこの日はスキー場
にいた。その後、地区のお
役をしていたときには何度
か成人式に出席した。市内
でも田舎の多家良村の式典

では市長など来てくれな
い。つまらない式典のなか
でせつかく晴れ着来て出
席してくれた若者に礼を
失しないように和顔愛語
もつて座つていた。式典は
形骸化し、感激するものが
少ないことは若者ならず
とも共感できる。
このセレモニー若者は
出席したこと何を得ら
れるのだろうか。学校の卒

業式は卒業証書或いは学位
記があたえられる。二十歳
は選挙権をはじめ、国民の
権利と義務が全て与えられ
るはずだが、目に見えるも
のではない。ここで選挙手帳
(或いはカード)を提案し
たい。それは、このときの
出席者のに手渡し。爾後、
全ての選挙入場券として、
パスポートのように押印し
ていく、或いは電子化して
選挙人名簿、保険、母子手
帳、印鑑証明等を記録され
るようになる方法も良
い。住所変更はこの手帳に
記録しておけばよいから、
生涯使えるというわけだ。
それを式場一番偉い人が一
人一人握手などして手渡し
とよい。もちろん、座席は
指定席、個人々々を呼ぶの
である。個人の人格をいう
とき、自分の場がないので
は話にならない。出席しな
かつたものは少々手続きを
ややこしくして役所へもら
いに行く、それもしないも
のは選挙権そのものがない
というのはいかがだろうか。
英語でセレモニーという
のは日本語の式典・儀式と
同じかも知れないが、この
際は単なるカタカナ日本語
として考えていただき、要
するに簡単なセレモニーを
いう。式典とはセレモニー
のもう少し厳格なもの。儀
式はさらに神聖なもの。祈
りのあるものと、私流、独断
で言葉を定義しておく。人
は生涯、幾度かセレモ
ニー、式典・儀式を経験し
なければならぬ。子供の

宮参り、五七三、入学式、卒
業式、結婚式等々の通過儀
礼を経験して大人になる。
私どもの場合は得度、加
行、受戒、灌頂等々の儀式、
行を普通十年経て一人前の
僧侶になる。簡単なものか
ら高度な儀式までたくさん
ある。そういつたものを受
けることの少ない現代の若
者はその処し方を知らない。
成人式を若者に任せ
たセレモニーにするというも
のもあるが私は反対だ。そ
こまで迎合することはな
い。結婚式の二次会という
のがやりだが、同様、成
人式の二次会ならかまわな
い。昔の元服にかわるもの
として大人が儀式として考
えるべきだ。

儀式というのは受ける側
と授ける側を明確にして前
者は後者に従わねばなら
ぬ。この原則を崩してはな
らぬ。因みに我々の最高の
厳儀、傳法灌頂では灌頂壇
のなかに傳法灌頂を受けた
ものでなければ入れない。
結縁灌頂を受けた方はご存
じと思つたが、内部の多く
のお手伝いは全員傳法灌頂を
受けている。言い換えれば
なかの様子を未灌頂のもの
には絶対に見せない。この
伝統を受けついできた結
縁、受者は新鮮な感激と法
悦を得るのである。

編集後記

今月は吉田範二さんの貴重
な原稿を頂き、毎月の体裁を
かえて特集した。
仁王門の決算は一月十八日の
奉賛会役員会において承認
掲載させていただきます。